AG5だより

日本人学校・補習授業校を応援します！

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業（https://ag-5.jp）

多文化共生の学校づくり～青島日本人学校の実践～

青島日本人学校教員 岡本直恵

青島日本人学校は、昨年度よりＡＧ５のテーマ②「日本語力向上プログラム『バイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発』」に取り組んでいます。昨年度は、在籍級担任と日本語指導担当が連携して行う日本語指導、バイカルチュラル人材育成の視点からの教科指導に取り組みました。そして今年度は多文化共生の学校づくりを目指した授業実践に取り組んでいます。

はじめに

本校は、在籍者の約半数以上がさまざまな国のルーツを持つ家庭の子どもであることから、もともと多様性に富んだ環境にあります。しかし傾向として、上の学年になるほど無意識に日本の価値観、ルール、文化の基準に従うような場面が見られるため、子どもたちが自分の背景を包み隠さず出せるような関係づくりが大切だと感じています。

そこで、それぞれの背景にある文化や習慣にも目を向け、尊重し合える関係を構築し、学校生活における共通の課題に対して「日本語」を媒介として対等に話し合っていくためにも、「日本語力の向上」と「多文化共生の学校づくり」の両軸を意識して日々の指導にあたっています。

昨年度の取組（二〇一九年度）

（一）課外の日本語教室

小学部一年生を対象に、毎週金曜日の課外に四十五分間の日本語教室を開設しました。開設するにあたって入学前に日本語指導が必要な児童の保護者と相談し、入学直後から日本語教室での学習を開始しました。

一学期は一日も早く周囲とコミュニケーションがとれるようにするための「生活に必要な日本語」を、二学期からは台北日本人学校の取組を参考にして「国語や算数などの教科の先行・補充学習」を中心に行いました。二月から新型コロナウイルスの影響で休校となったため、日本語を発する時間を確保したいという願いから、二・三月はオンラインによる日本語教室を実施し、一年間の復習を行いました。

（二）中学部・個別の日本語指導（取り出し）

中学部の二名の生徒に対し、在籍級が学活や部活動の時間に、週一回の個別の日本語取り出し指導を行いました。二人とも小学部高学年の時に現地校から転入してきた生徒です。

生活言語能力はさほど問題ありませんが、学習言語能力に課題があるため、日本語指導担当はできるだけ在籍級の授業を見に行き、ワークシートの書き方や音読・発表練習などを個別指導の時間に支援しました。休校期間中は日本語の語彙を増やす機会ととらえ、週一回オンラインによる指導を行いました。

（三）在籍級での日本語指導

在籍級担任と日本語指導担当が連携し、教科内容をあらかじめ学習したり、分からなかったところを補充したりしています。

毎週末に日本語教室での学習について打合せし、学習の様子も参観しているので、担任はその様子を把握しながら授業を行っています。在籍級担任が日頃から心がけているポイントと指導の成果は以下の通りです。

〈ポイント〉

・掲示物の作成・音読指導・動作化・動画や写真の利用・作文指導・曜日や月日の言い方

〈指導の成果〉

①音読：初めて見る文章でもほぼつかえることなく正しい発音で音読。

②発話：教科書の物語文や説明文の理解。言葉による置き換え（「えものをとる」→「かりをする」）。物語の好きなところを日本語で言ったり中国語で説明したりする。学校からの連絡を家族に中国語で説明する。

③作文：日本語での簡単な作文

（四）全学年でのバイカルチュラル人材育成の視点からの教科指導

ＡＧ５の研究を進めるにあたり、校内研修においてバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のために学校全体でどのように取り組んでいくかを考えました。

そこで本校の中期目標「多様性を理解し、自他を尊重しながら切磋琢磨する児童生徒の育成」を受けて、児童生徒が中国での生活や学習を通

して、①世界には多文化・多言語・多様な価値観があることについて理解すること　②日本の習慣・文化・伝統との比較、検討することの二つの視点から各教科・各学年で取り組めることを話し合い、実践しました。

〈実践例〉

中一社会（地理）：「世界から見た日本の自然環境」の単元学習において、世界の川と日本の川の比較・検討を行いました。中国と日本の二つの文化を持つ生徒は、川の写真を見てすぐに「長江！」「黄河！」と反応して興味を高めることができました。

一方で、単語での反応で終わらせずに、自分の思いや考えを短い文章でまとめられるように導いていかなければという課題が出てきました。

今年度の取組（二〇二〇年度）

（一）日本語指導

①課外の日本語教室（小一・二）

今年度は対象を小学部一・二年生に広げて実施しています（小一金曜日、小二月曜日）。

・小一：休校中（四、五月）はオンライン日本語教室を週二回行い、自己紹介や持ち物、教室での言葉などを学習しました。学校再開後（六月～）は学校生活で必要な日本語（われた／かして／ありがとう／けがをしました／頭が痛いです、など）を、ロールプレイやインタビューを多く取り入れ、発話重視で進めました。二学期からは教科の先行・補充学習を中心に学習を行っています。

・小二：休校中はオンライン日本語教室を週一回実施し、国語の先行学習を中心に行いました。学校再開後は学級担任と相談しながら、国語と算数の先行・補充学習を行っています。また九月には、日本語指導担当と在籍級担任とでＤＬＡの四項目（話す、読む、書く、聞く）のアセスメントを数回に分けて実施しました。測定結果を在籍級での指導に生かしたいと考えています。

②個別の日本語指導（中一・二・三）

四月二十日の始業式後に対象生徒の保護者と今年度の日本語指導についてオンラインで相談しました。休校中は週一回オンラインによる個別指導、学校再開後は中国語や部活動の時間に取り出し指導を行っています。在籍級担任・教科担任に授業の様子を聞いたり、担当が在籍級の授業の様子を見に行ったりしながら、そのときに必要な学習をしています。

個別指導の中で学習言語能力について次のような課題が見られました。今年度はこれらの課題をもとに中学部の指導計画を作成する予定です。

〈学習言語能力についての課題〉

・漢字を読むときに中国語読みになったり、訓読みの単語を音読みしてしまったりする場面が多く見られる。

・短作文を書くとき、中国語の母語干渉の影響が見られる（「の」の多用、助詞の使い方）。

・数学の文章題における学習用語が正しく読めない。問題で何を問われているのかをつかめない。

・歴史は漢字が難しくて覚えにくいと話している。

・iPadで調べ学習をするときに、ローマ字が分からないためローマ字入力に苦労している。

③在籍級での日本語指導

〈実践例〉

小一国語　「うみのかくれんぼ」の授業から、かくれんぼクイズづくり、「とい」と「こたえ」の学習では、教科書を読み取ったあと、自分が選んだ生き物の「かくれるばしょ」「からだのとくちょう」「かくれかた」をまとめることができました。

小二国語　「どうぶつ園のじゅうい」では、ＪＳＬカリキュラムの五つの視点より理解支援と表現支援に着目した写真入りのワークシートを作成し、それを用いて獣医の仕事の工夫や自分の考えをまとめました。

また漢字学習では、視覚支援として書き順動画を見ながら、漢字を書く練習を行いました。iPadの書き順動画を何度も見て空書きを行う子どもたちの姿から、記憶支援としても有効だということが分かりました。

中二国語　（在籍級教科担当と日本語指導担当の連携）

毎時間の授業後五分間（一週間で二十分間）、教科担任が音読指導や補充指導を行っています。継続して指導することで学習言語が少しずつ定着し、特に音読で成果が出ています。

（二）「多文化共生の学校づくり」を目指した実践の積み上げ

多文化共生の学校づくりを目指して、本校でこれまで培ってきた国際理解教育の活動に、①多様な人とかかわる機会をつくることで他者と関係をつくり出す力、②課題を他者とのかかわりを通して解決する力、③他者や未来への創造力の育成等の視点を入れて、各学年、各教科で実践を積んでいます。

〈実践例〉

中三社会科　多文化共生のまちづくり成功事例の調べ学習を通して、私たちに求められている態度を論述する授業では、総務省が発行する『多文化共生事例集』に載っている多文化共生のまちづくりの成功事例から

共通点を読み取り、最終的には私たちに求められる態度を論述できました。また、「多文化共生2・0」や「インターカルチュラルシティ」などの最新情報も学び、今後の多文化共生の在り方を考える機会となりました。

中学部は全学年が学活や道徳の時間などに、多文化共生に関するワークブックを使用したり、自作のテーマで授業を展開したりして「多文化共生」についての考えを深めています。また、中三は多文化共生に関するCMづくり「多文化共生社会における課題をsociety5.0の技術で解決しよう！～あったらいいなこんなモノ～」にも取り組みました。

中一　「自分が当たり前だと思って過ごしているけど、他の国ではそうではない、驚かれる事を考えてみよう」（自作資料）。日本と他国では宗教、国の情勢、国民性、食文化などに違いがあることを知り、その違いを尊重することが大切であり、それを知らないと知らず知らずのうちに相手を傷つけてしまうことがあることについて考えました。授業を終えて、中国と日本が似ていることや欧米とは違いがあることにも気付いたようです。生徒たちには多様な文化を受け入れる素地があることを実感しました。

中二　言語の平等を考える・わかりやすく伝えよう！　～やさしい日本語～というテーマで、看板や緊急時のことを例に、外国人にも分かりやすい日本語を一緒に考えました。

国際家庭の生徒は日本語を使う機会が学校生活だけという環境のため、『やさしい日本語』を考えるのに苦労しているようでしたが、『やさしい英語』や『やさしい中国語』で考えてみる時間を設定することによって、簡単な言葉（単語）を使って説明すれば大丈夫ということで、安心して学習に取り組むことができました。

中三　ホームルームで考えよう・異文化尊重と公平（多文化社会のジレンマ「掃除編」）では、「異なる文化背景を持つ人たちとうまく折り合いをつけるためにはどうすればよいだろうか？」について考えました。

まとめでは、「その時にどこまで自分が知らない文化や考え方について理解できるかが大切だと思った。相手の文化に合わせる必要も遠ざける必要もないけれど、受け入れる態度を示して、対等に話し合いをしていきたい」という感想が見られました。

＊小学部・オンライン交流会

小一生活科　山口県下関市立本村小学校一年生との交流（十一月）。生活科「むかしからつたわるあそびをたのしもう」の学習をメインに、学活、道徳、国語との教科横断型学習を行いました。

小五・六総合　長崎県佐世保市立江上小学校六年生との交流（十月）。

討論テーマ「わたしたちの平和島」：「平和島」（架空）に日本、中国、アメリカ、韓国、それぞれのルーツを持つ人々が集まった。そのうち同じルーツを持つ人同士のコミュニティが形成され、さまざまな問題が発生。住人たちはこのままではいけないと解決方法を考えることにした。

グループワークでは、①起こりうる問題、②解決方法、③「平和島」の望むべき姿の三点について話し合い、最後の全体会ではホワイトボードにまとめた「めざす平和島の姿」を発表しました。また、事後指導では現実問題として考え、「家の中では自由に過ごし、公共の場ではルールを守って快適に過ごしたい。お互いに歩み寄って生活していくことが大切だ」と考えを深めました。

小5・6の交流（グループワーク）

取組の総括と今後に向けて

本校での日本語個別指導を三年間担当して実感したことは、十月までは日本語を吸収する時期であり、十一月以降に溜まった水があふれだすかのように急激に発話量が増えるということです。一例として、昨年十一月、在籍級での授業中に、バイリンガルの子どもたちがA児童にいつものように教師の指示を通訳しました。それに対し「わたし　わかる！」と日本語で意思表示したのです。これまでほとんど進んで日本語で発話することはありませんでしたが、この日を境にA児童の表情は明るくなり、発話が急激に増えました。日本語指導担当としてこの上ない喜びを感じた瞬間でした。

今後は全学年で「多文化共生の学校づくり」の実践を積み上げ、年度末には実践集としてまとめる予定です。今後もAG5運営指導委員会や関係校のマニラ・大連の先生方と共に「日本人学校日本語向上プログラム」の研究を推進し、日本と中国の架け橋となる人材の育成を目指して教育活動に取り組んでいきます。